広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

鋳造ガラスの魅力をより身近に

十川 賀菜子（とがわ かなこ）　大阪／ガラス作家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

1月24日 プレゼンテーションにて

プレゼンする十川さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

展示ブースでバイヤーに説明

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。大阪府選出の匠、ガラス作家の十川賀菜子さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

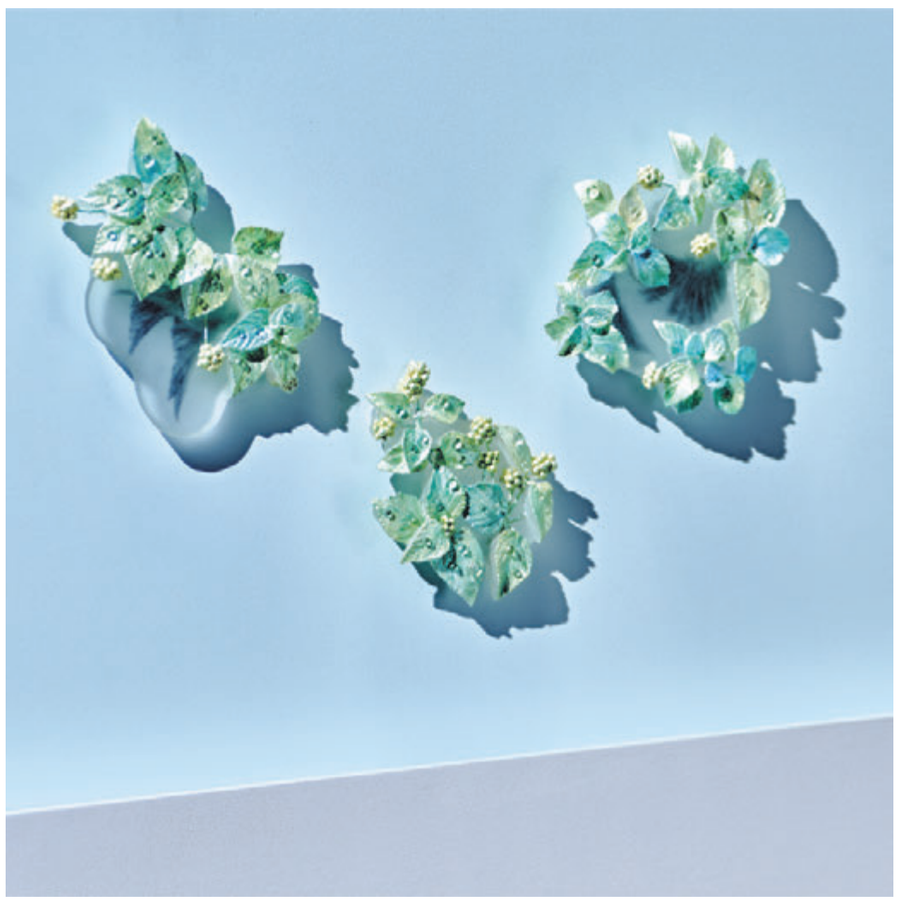
1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

キルンワークで「雨上がり」を表現

十川さんはキルンワークという電気炉（キルン）を使ったガラス鋳造技術により、ガラス板に墨などで絵を描いた大型の鋳造ガラスアート作品をつくってきた。今回のプロジェクトでは、これまでの作品づくりで培った技術を生かし、日本の住空間でも飾りやすいサイズと重さの壁掛けを制作した。「石膏型をつくってキルンワークでガラスを造形し、ガラスの表面を荒らすことで顔料がのる特徴を生かしながら、葉の部分を彩色しています。葉の表面には透明なガラスの雨粒をあしらい、裏側には飛んで行った鳥たちの羽が水たまりにうっすらと写る様子を描いて、雨が上がったばかりの瑞々しい情景を表現しました」。

繊細なデザインスケッチ

実は、十川さんがこの作品をつくりあげるまでには産みの苦しみがあった。プロジェクト参加当初は、量産できて普段使いができるプロダクトをつくりたいと考え、ガラスの重箱の試作を繰り返していた。しかし重さが気になるなど、なかなか理想的な仕上がりにならず悩んでいたところ、エリア・コンサルティングで工房を訪れた生駒氏から「量産できるプロダクトにこだわりすぎているのでは。もっと十川ワールドを前面に出した作品をつくってみたら」とアドバイスされて気持ちが吹っ切れた。途中での軌道修正には勇気がいったが、アイデアを一から練り直すことに決め、ここからは自分らしいアート作品をつくることに専念した。「自分のアートワークでいいんだと思ったら、気持ちが楽になり、つくりたいものがクリアになって、この作品が生まれました」という十川さん。これまでチャレンジしたことのなかった小さなサイズの作品でも自分らしさが出せることがわかり、新境地が拓けたと喜んでいる。「この作品を個人宅やホテル、多くの方に見てもらえるパブリックな空間に飾ってもらえたらうれしいですね」。


完成プロダクト「After the rain」

ガラスの魅惑的な美しさを伝えたい

ガラス作家として6年のキャリアを持つ十川さんは、これまでは横2メートルもあるような大型の鋳造ガラス板に墨や銀箔を合わせ、墨の濃淡とガラス特有の透明感が生み出す光と翳（かげ）に自分の美意識を投影したアート作品をつくってきた。「子供の頃からガラスが生み出す光と翳（かげ）が好きだったんです」と、これまではオリジナルのガラスジュエリーブランド「ベレッツァ　グラス　ジュエリー」のデザイン・制作を行う一方、大型のアート作品を制作してアメリカを中心に個展を開催。作品のほとんどは海外の美術館や個人コレクターに所蔵されている。

エリア・コンサルティングにて
左：生駒氏、右：十川さん

ガラスの魅惑的な美しさに引かれて地元の大阪芸術大学工芸学科ガラスコースで学び、日本画の表現方法とキルンワークを組み合わせた作品をつくり始めたという十川さん。大阪で制作することについては「ガラス作家は他の素材と比べても人口が少ないと思いますが、大阪で活動している人も少ないです。その中でアートのイメージがない大阪から稀有な表現方法で発信していくのも面白いかなと思いました」と話す。

このプロジェクトに参加して改めて感じたのは、挑戦をすることの大切さだ。プロジェクトの中で自分らしい作品を生み出すために苦しんだ十川さんは、「今までの大型作品は海外のギャラリーにしか置けなかったのですが、小型のアート作品をつくったことで、新たに建築・インテリア分野への販路がこれから広がると思いました。キルンワークという技法はあまり知られていないので、今後は私の作品を通して、キルンワークの魅力を多くの方に伝え、これからも大阪から世界へ発信していきたい」と意欲に燃えている。

電気炉で鋳造ガラスアート作品をつくり出す

十川 賀菜子（とがわ かなこ）
大阪／ガラス作家

1986年大阪府生まれ。幼少期に、実家にあったバカラのワイングラスを見てガラスの持つ光と翳に興味を待ち始める。17歳の頃、ヴェネツィアの吹きガラス工房を訪れた際に、溶けたガラスの動から静へと表情が変化する面白さと可能性に、高校で学んだ日本画の技法を活かして新しい表現ができないかと思い、大阪芸術大学工芸学科ガラスコースへ入学。キルンワークという鋳造技法を使い作品制作を行う。現在は国内外で個展を開催。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT